

アミール・アブドゥルカーディル・ジャザーイリー 関連年表

梶堀 木綿子*

アブドゥルカーディル (al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, 1807–83) は、アルジェリアの建国の父と称えられる人物であり、そのことはアルジェリアの各地に彼の銅像が建てられているという事実から端的に見て取ることができる。彼はフランスの植民地支配への抵抗運動 (1832–47) の中心人物であり、フランス軍に対して互角の戦いを繰り広げた。彼は常備軍を設立し、外交政策を展開するなどして 1837–39 年の間、短期間ではあったが、国家制度の枠組みのもとに諸部族を統一することに成功した。しかし、部族社会統合の困難さと列強との力の差の前に結局は降伏した。その後、フランスでの虜囚、アナトリアのブルサ滞在を経て、1855 年から彼はシリアのダマスカスに居住した。彼は、ヨーロッパ支配が拡大しイスラームが危機に直面した時代に、自ら戦った植民地抵抗運動と敗北を通じて、列強勢力との力の差を理解したのであった。そのうえで、彼は自らの思想をより深化させていくこととなる。彼の思想的営為は、サラフィー主義とスーフイズムの調和、伝統と近代の調和を体現していたと評することができる。彼の思想は、行動の形をとって可視化されたが、とりわけ 1860 年、ダマスカスでのムスリムによる暴動に際してキリスト教徒救済を行ったことは、個人の利害を超えた人道主義に基づく行動として高く評価されてきた。今日のアブドゥルカーディルに対する評価は以下の 4 側面に集約することができる。第一は抗仏植民地運動の指導者・政治的指導者の側面¹⁾、第二はアルジェリア・ナショナリスト (もしくはその先駆者) の側面²⁾、第三は存在一性論学派に属するスーフイー思想家の側面³⁾、第四は改革主義思想の教育者の側面⁴⁾ である。

本年表はこれらの諸側面に関わる情報をなるべく網羅的に集めたものである。その際、対象を「アブドゥルカーディル」、「アルジェリア」、「その他」の項目に区分し、時代的には、抗仏運動以前、抗仏運動期、抗仏運動後、後世に分けて記述した。「その他」の項目には、上述の 4 つの側面に何らかの意味で関わりがあるできごとを取り上げた。

年表作成にあたって参照した文献

アージュロン、シャルル＝ロベール (著) 私市正年 / 中島節子 (訳) 『アルジェリア近現代史』白水社, 2002 (Charles-Robert Ageron, *Histoire de l'Algérie contemporaine*, 11^e edition, Paris: Publication Universitaire Française, 1999) .

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) この側面については、たとえば R. Danziger, *Abd al-Qadir and the Algerians: Resistance to the French and Internal Consolidation*, New York: Holmes & Meier Publishers, 1977; J.A. Clancy-Smith, *Rebel and Saint: Muslim Notables, Populist Protest, Colonial Encounters (Algeria and Tunisia, 1800-1904)*, Berkeley: University of California Press, 1997 を参照。

2) この側面については、たとえば Cheikh Bouamrane, *L'émir Abd-el-Kader, résistant et humaniste*, Alger: Hammouda, 2001; M. Kaddache, *L'Émir Abdelkader: Art et Culture*, Alger: SNCD, 1974; 2^{ème} Edition, Alger: Ministère de l'information (DDP), 1982 を参照。

3) この側面については、たとえば Émir Abd el-Kader, *Écrits spirituels (Kitāb al-mawāqif)*, M. Chodkiewicz (pr. & tr.), Paris: Seuil, 1982, Émir Abd el-Kader, *Poèmes métaphysiques*, C. A., Gilis (tr. & pr.), Paris: Les Editions de l'Œuvre, 1983 を参照。

4) この側面については、たとえば D. Commins, “‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī and Islamic Reform”, *The Muslim World* 78 (2), Hartford: Hartford Seminary Foundation, 1988, pp. 121–131, I. Weismann, *Taste of Modernity: Sufism, Salafīyya, and Arabism in Late Ottoman Damascus*, Leiden: Brill, 2006 を参照。

服部春彦・谷川稔編著 『フランス近代史—ブルボン王朝から第五共和制へ—』 ミネルヴァ書房，1993.

中岡三益『アラブ近現代史』 岩波書店，1991.

宮治一雄「年表」『アフリカ現代史 V』（世界現代史 17）山川出版社，1978.

大塚和夫、小杉泰、小松久男、東長靖、羽田正、山内昌之編『岩波イスラーム辞典』 岩波書店，2002, pp. 1094–1104.

Abun-Nasr, J.M. *A History of the Maghrib in the Islamic Period*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987.

Aouli, S., R. Redjala, P. Zoummeroff, *Abd el-Kader*. Paris: Fayard, 1994.

Azan, P. *L'Emir Abd el-Kader 1808-1883 : Du fanatisme musulman au patriotisme français*. Paris: Hachette, 1925.

Bellemare, A. *Abd al-Kader: Sa vie politique et militaire*. Paris: Hachette, 1863.

Bouyerdene, A. *Abd El-Kader: L'harmonie des contraires*. Paris: Editions du Seuil, 2008.

Clancy-Smith, J. A. *Rebel and Saint: Muslim Notables, Populist Protest, Colonial Encounters (Algeria and Tunisia 1800-1904)*. Berkeley: University of California Press, 1997.

Danziger, R. *Abd al-Qadir and the Algerians: Resistance to the French and Internal Consolidation*. New York: Holmes & Meier Publishers, 1977.

Dermenghem, É. “Les souvenirs de l'émir Abdelkader dans la région de Mascara” *Bulletin des études arabes*, Alger, 1949, pp. 147–149.

Fondation Emir Abdelkader. *Itinéraire 5*. Alger: Edition ANEP, 2001.

———. *Itinéraire 2*. Alger: Edition ANEP, 1998.

Julien, Ch.A, *Histoire de l'Algérie contemporaine, Tome I : La conquête et les débuts de la colonisation (1827-1871)*. Paris : Press Universitaire de France, 1964.

Mahsas, A. *Un acteur de la révolution lève le secret sur: Réalités coloniales et résistances*. Alger: Editions el Maarifa, 2006.

Martin, B.G. *Muslim Brotherhoods in Nineteenth-Century Africa*. New York: Cambridge University Press, 1976.

Tauber, E. “The Political Role of the Algerien Element in Late Ottoman Syria” *International Journal of Turkish Studies*, 5 (2), Madison: University of Wisconsin, 1991, pp. 27–45.

Vikør, K.S. *Sufi and Scholar on the Desert Edge: Muhammad b. Ali al-Sanusi and his Brotherhood*. Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 1995.

Weismann, I. *Taste of Modernity: Sufism, Salafiyya, and Arabism in Late Ottoman Damascus*. Leiden: Brill, 2006.

資料 1

<http://www.masjidelemir.org/English/h4.html> (2009/01/28)

資料 2

<http://www.liberation.fr/monde/010114544-a-paris-une-place-pour-un-emir> (2008/01/27)

資料 3

http://www.univ-oran.dz/labos/Emir/web/Emir_webFR/dates.html (2009/01/28)

資料 4

<http://damascus.org.sy/archive/docs/File/downloads/JazairiProgrammeLR.pdf> (2009/01/28)

抗仏運動以前

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1516年		ハイルッディーン、オスマン朝スルターンに降伏し、アルジェを献上する手紙を送る [Abun-Nasr 1987,150]。	
1525年		オスマン帝国、アルジェ支配開始 [Abun-Nasr 1987,150]	
1551年			リビア、カラマンリー朝成立 [Abun-Nasr 1987,190]。
1574年			チュニジア、オスマン帝国の一部となる [Abun-Nasr 1987,153]。
1668年			モロッコでアラウィー朝が起こる [Abun-Nasr 1987,230]。
1715年			チュニジアでフサイン朝が起こる (1957年廃止) [Clancy-Smith 1997,xxi]。
1739年		カビール出身のムハンマド・イブン・アブドゥッラフマーン、巡礼 (-40)、カイロのアズハル大学で学び、ハルワティー教団に学ぶ [Clancy-Smith 1997,40]。	
1749年	スペイン軍、オラン近郊に上陸。ベイと近隣の名士との同盟によって駆逐。その中にアブドゥルカーディルの曾祖父が参加し、戦闘で亡くなった [Martin 1976,41]。		アフマド・イブン・イドリース、モロッコの大西洋岸のララシュ地方、マイスールにこの時期生まれる (1750とも) [Vikor 1995,101]。
1754年			12月15日、ウスマン・ダン・フォディオ、ハウサランド北部のマラッタに生まれる。カーディリー教団への所属、ジハードの遂行、その正当性としてジューラーニーのヴィジョンを根拠とした点などで、アブドゥルカーディルとの共通性が多い [Martin 1976,15]。
1770年		ムハンマド・イブン・アブドゥッラフマーン、アルジェリア東部カビール地方でラフマーニー教団結成 [Clancy-Smith 1997,40]。	
1776年	アブドゥルカーディルの父、ムフィッディーン生まれる (-1833) [Martin 1976,48]。		
1781年		ティジャーニー教団、アフマド・ティジャーニーにより結成される [Martin 1976,45]。	
1786年			ハルワティー教団のスーフイー、アフマド・ダルディール、モロッコで反乱運動 [Vikor 1995,84]。
1787年		12月22日、サヌースィー教団創設者、ムハンマド・ベン・アリー・サヌースィー、アルジェリアのムスタガネム近郊に誕生 [Martin 1976,100]。	
1788年			ハウサランド東部のゴビール朝の王、バワ・ジャン・ワルゾ、ウスマン・ダン・フォディオの暗殺を企てた [Martin 1976,20]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1791年	アブドゥルカーディルの祖父ムスタファー、巡礼から帰還、ゲトナにカーディリー教団のザーウィヤ建設 [Danziger 1977,52]。		
1792年		マスカラの統治者、ムハンマド・ベイにより、スペイン人が西部アルジェリアのオランから退去させられた [Danziger 1977,52]。	
1794年			ウスマン・ダン・フォデオ、神秘体験でヴィジョンにアブドゥルカーディル・ジーラーニーを見る。ジーラーニーは彼にターバンと神の剣を手渡したとされる [Martin 1976,25]。
1795年		モロッコのスルターン・ムーレイ・スレイマン、オラン州に侵入しトルコから重要な都市ウジュダを奪った。この事件はオスマン帝国の弱体化を示すものと位置づけられる [Danziger 1977,42]。	
1796年	この頃アブドゥルカーディルの兄、ムハンマド・サイド誕生 [Danziger 1977,54]。		
1798年	アブドゥルカーディルの祖父ムスタファー、巡礼から帰還する途中、キレナイカで没 [Martin 1976,48]。	1790年代後半、オラン地方で伝染病流行、大規模な地震も [Martin 1976,42]。	イブン・イドリース、モロッコを離れ、キレナイカ、ジャバル・アル・アフダル経由でマッカに行き、講義を行った。サヌースイーもその後同じ行程を辿った [Vikor 1995,105]。 7月21日、ナポレオン、エジプト遠征 [大塚 2002,1094]。
1799年			ダルカーウィー教団のハーッジ・ムハンマド・アフラシュ(ブー・ダリ)、マッカ巡礼から帰還する途中でフランスによって攻撃されているエジプトに立ち寄り、ジハード遂行のために人々を集結させた。彼はチュニス ¹⁾ のベイによりアルジェリア東部コンスタンティーヌのベイと戦うことを許可された [Martin 1976,43]。
1800年			ワッハーブ運動政治的指導者、サウード・イブン・アブドゥル・アズィーズ、巡礼隊の先頭としてマッカを訪れる [Vikor 1995,92]。
1802年		ダルカーウィー教団シェイフ、アブドゥルカーディル・イブン・シャリーフ、マフディーを宣言。ベン・シャリーフは、ゲトナのザーウィヤで学び、アブドゥルカーディルの父であるムフィッディーンとも面識があった [Martin 1976,44]。	
1803年		ダルカーウィー教団のシェイフ、ブー・ダリ、アルジェリア東部においてトルコ体制に対して反乱を起こす [Danziger 1977,26]。	3月、サウードに率いられたワッハーブ派、マッカ占領 [Vikor 1995,65]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1804年		アルジェリア東部コンスタンティーンのベイ、ブー・ダリとの戦いで死亡 [Danziger 1977,26]。	ウスマン・ダン・フォディオ、ナイジェリア北部でゴビール朝に対するジハード開始 [Martin 1976,21]。
1805年		ダルカーウィー教団の指導者、アブドゥルカーディル・ベン・シャリーフ、エグリス高原とマスカラの部族を集結させ、オランのベイの軍隊を破る [Danziger 1977,26] [Martin 1976,44]。	サヌースィー、学問のため故郷を離れる (-06) [Vikor 1995,32]。 5月、エジプト、ムハンマド・アリー朝成立 [大塚ほか 2002,1094]。 シャイフ・ハーリド、マッカ巡礼 [Weismann 2006,26]
1806年			ウスマン・ダン・フォディオ、ヒジュラの必要性についての論文執筆 [Martin 1976,32]。 この頃、ヒジャーズからマグリブに、聖者崇拜を非難する警告文書が届く [Vikor 1995,65]。
1807年	9月26日、マスカラ近郊、ウエド・エル・ハマムのゲトナ村において、ムフィッディーンと第二夫人ゾフラとの間に、アブドゥルカーディル・ベン・ムフィッディーン誕生 [Danziger 1977,52]。		
1808年		5月-7月、ナポレオン1世の命により、ブータン指揮官が、アルジェ遠征準備のための地図作成目的で派遣された [Bouyerdene 2008,319]。	サヌースィー、マスカラ・トレムセンを訪れた後、モロッコのフェズに移動 [Vikor 1995,30-31]。
1809年		イブン・シャリーフ、トルコに敗退。だが、彼の戦闘は継続する [Danziger 1977,26]。	
1810年	この頃アブドゥルカーディルの弟、ムスタファー生まれる [Danziger 1977,54]。		ナイジェリア北部にウスマン・ダン・フォディオをハリーフアとするソコト・ハリーフア国成立 (-1903) [Martin 1976,23]。
1813年	アブドゥルカーディルの妹、ハデージャ生まれる [Danziger 1977,54]。	西部アルジェリアの人々から、モロッコのスルターンに対する忠誠の手紙 [Vikor 1995,56]。	ムハンマド・アリー指揮下のエジプト軍、ワッハーブ派をマッカから追放 [Vikor 1995,92]。 10月、ライプチヒの戦いでフランス軍、反仏同盟軍に敗北 [服部 & 谷川 1993,82]。
1814年		アルジェリアとチュニジアで海賊中止 (ヨーロッパ攻勢激化)	4月、ナポレオン退位、第一王政復古。ルイ18世即位 [服部 & 谷川 1993,82]。 テイジャーニー教団の祖、アフマド・テイジャーニー、フェズで没 [Martin 1976,45]。
1815年			ワーテルローの戦い、ナポレオン退位 [服部 & 谷川 1993,82]。 7月ルイ18世復位 (-24) 第二王政復古 (-30) [服部 & 谷川 1993,102]。 サヌースィー、フェズを出発しマッカに移動 (-17) [Vikor 1995, 32]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1816年		英蘭海軍遠征隊が、アルジェ遠征 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,585]。 イブン・シャリーフ、オランで抵抗運動 [Danziger 1977,26]。	サヌースイー、マッカ巡礼 [Vikor 1995,74]。
1817年		オラン、ハサンがベイに就任 [Danziger 1977,17]。	4月20日、ウスマン・ダン・フォディオ、ソコト近郊のシファワで死去。後半生を学問やスーフイズムに捧げ、多くの弟子を育てた [Martin 1976,23]。
1818年		アルジェの最後のベイにフサイン着任 (-30) [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,585]。	
1819年		12月、フサインがアルジェのベイに就任 [Danziger 1977, 16]。 モロッコのスルターン、ムーレイ・スレイマーン、アルジェリア西部のアイト・ウマル族にザイヤーンの戦いで敗北。モロッコ、飢餓と疫病に苦しむ [Vikor 1995,68]。	
1820年	この頃アブドゥルカーディルの弟、フサインとムフィッディーン生まれる [Danziger 1977,54]。	オランのハサン・ベイ、ティジャーニー教団の拠点アイン・マフディーに納税要求 [Danziger 1977,26]。 モロッコのムーレイ・スレイマーン、オランのトルコ体制への反乱を援助 [Danziger 1977,42]。	サヌースイー、春にメサアド、ジェルファ、ブー・サアダを訪れ教授を行い、アウラード・ナーイル族のもとに滞在 [Vikor 1995,79]。 サヌースイー、教育を行い同行者を増やしつつチュニジアのザイトゥーナで学んだ後、トリポリに2年滞在 [Vikor 1995,79]。
1821年	アブドゥルカーディル、この頃までにクルアーンを暗記した。オランのスィーディー・アフマド・イブン・ホージャに学ぶ [Danziger 1977,55]。		
1822年	アブドゥルカーディル、父方の従妹、ハイラ・ビント・アリー・アブー・ターリブと結婚 [Danziger 1977,55]。		サヌースイー、彼の支持者となるマフジューブ、イブン・バラカ、イブン・ファラジ・アラー、アシュハブと会う [Vikor 1995, 80]。 モロッコでアブドゥッラフマーン、スルターンに即位 (-59) [Clancy-Smith 1997,xxi]。 サヌースイー、カイロに到着し2年半から3年滞在 [Vikor 1995,81]。
1823年			ハーリド・ナクシュバンディー、イラクからダマスカスに移住、改革運動 (-27) [Weismann 2006, 26:213]。
1824年			6月6日、シャルル10世即位 (-30) [服部 & 谷川 1993,104]。
1825年			サヌースイー、ラグワートのダルカーウィー教団シェイフ、ムーサー・イブン・アフマルとフェズで会う [Vikor 1995,77]。
1826年	アブドゥルカーディル、父とマッカへの巡礼、チュニスまではキャラバン隊、チュニスからアレクサンドリアまでは海路、カイロではムハンマド・アリーの宮廷に迎えられたといわれる。エジプトからフランスの艦隊でジェッダ、マッカに [Danziger 1977,56]。		オスマン帝国スルターン、メフメト2世、イェニチェリ軍団廃止。中央集権化による帝国の再生の試み [Weismann 2006,9]。 6月、サヌースイー、マッカ巡礼。イブン・イドリースとの面会で名声を高める [Vikor 1995,89]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1827年	<p>アブドゥルカーディル、アブ・クバイスでサヌースイーと会い歓待を受ける。このとき、サヌースイーは、アブドゥルカーディルがジハードの旗印のもと、イスラームの土地を拡大していくだろうと予言 [Vikor 1995,125]。</p> <p>アブドゥルカーディルと父、シリアのウマイヤ・モスクで、シャイフ・アブドゥッラフマーン・クズバリによるブハーリー『真正集』についての講義に出席。シャイフ・ハーリドのもとでナクシュバンディー教団の教義を学ぶ [Danziger 1977,57]。</p> <p>アブドゥルカーディルと父、バグダードに3カ月滞在。・ジーラーニー廟を参詣。シャイフ・ムハンマド・カーディリーからカーディリー教団の布教資格を二人とも授与される [Danziger 1977,57]。</p> <p>アブドゥルカーディルと父、ダマスカス経由で二度目のマッカ巡礼 [Danziger 1977,57]。</p> <p>アブドゥルカーディル、帰還の折カイロのアズハル大学で学ぶ [Danziger 1977,58]。</p>	<p>4月30日、アルジェのデイ・フサイン、債務問題をめぐってフランス領事デュバルを殴打(扇の一打事件)。アルジェとパリの間での対立が深まる [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,585]</p> <p>6月16日、フランス海軍、デイへの報復としてアルジェを包囲 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,67]。</p> <p>ティジャーニー教団のムハンマド・カビール、ハーシム族と協力して、エギリス高原でオランのベイと戦う。敗れたムハンマド・カビールはアルジェで処刑された。この事件はアブドゥルカーディルに対するティジャーニー教団の協力を不可能にし、イスラームに基づく人々の統合を不可能とすることになる [Martin 1976,62]。</p>	<p>イドリース、マッカをこの頃去り、イエメンのサバに滞在。サヌースイーはマッカでの彼の代理人(ハーリーファ)となった [Vikor 1995,113]。</p> <p>ハーリディー教団、シャイフ・ハーリド、ダマスカスで死去 [Weismann 2006,27]。</p>
1828年	<p>アブドゥルカーディルと父、ゲトナに帰還。全オランから訪問者、数ヶ月祝祭が催される [Danziger 1977,57]。</p>		
1830年		<p>6月14日、フランス遠征隊、アルジェ近郊のスィーディー・フェルーシュ湾上陸 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994]。</p> <p>6月18日、スィーディー・フェルーシュ北西、スタウエリにおいてフランス軍とデイとの軍との戦闘 [Mahsas 2006,137]。</p> <p>7月5日、フランス軍、アルジェ占領 [Danziger 1977,36]。</p>	<p>3月18日、フランスで内閣不信任案決議 [服部 & 谷川 1993,107]。</p> <p>7月25日、アルジェ占領を受けて、フランスでシャルル10世は、出版の自由を停止し、議会を解散し、選挙権資格を土地所有者に限定する七月勅令公布 [服部 & 谷川 1993,107]。</p> <p>7月27-29日、フランスで勅令に抗議して七月革命 [服部 & 谷川 1993,107]。</p> <p>7月31日、シャルル10世退位 [Bouyerdene 2008,320]。</p>

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1830年	<p>オランのハサン・ベイはムフイッディーンに保護を求めた。だがアブドゥルカーディルの反対により、ベイの申し出は拒否された [Danziger 1977,59]。</p>	<p>8月2日、フランス軍、アンナバー時占領 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,585]。</p> <p>8月3日、フランス軍がオランの沿岸のメール・ケビールを占領 [Danziger 1977,59]。</p> <p>9月2日、クロゼル将軍、プールモン将軍の後任となる [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,585]。</p> <p>9月、ムハンマド・ベン・ヌーナ、トレムセンのアラブ人たちにアブドゥッラフマーンの権力を認めさせた [Danziger 1977,76]。</p> <p>10月、モロッコのスルターン・アブドゥッラフマーン、彼の従弟であり義弟、15歳のムーレイ・アリーをトレムセンにおける彼のハリーフアに任命。アブドゥッラフマーンの伯父、イドリース・ジャザーイリーは後見人となる [Danziger 1977,42]。</p> <p>11月7日、ムーレイ・アリー、500名の兵士を率いてトレムセンに進行。オランへの軍事的干渉開始 [Danziger 1977,42]。</p> <p>ムーレイ・アリーは、旧トルコ軍、マフゼン族の財産を没収し、長を投獄した [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,80]。</p> <p>コンスタンティーンの最後のベイ、アフマド、独立国家設立の運動を開始する [Clancy-Smith 1997,xxii]。</p> <p>11月26日、ティトゥリー県ベイ、ブー・メズラグ、フランス軍に拘束され、州都メデアが支配された [Danziger 1977,40]。</p> <p>12月15日、クロゼル将軍、コンスタンティーンのアフマド・ベイを退位させ、チュニジアの国王の従兄弟スィーディー・ムスタファーを擁立する条例を適用 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,85]。</p>	<p>8月9日、ルイ・フィリップ即位、七月王政 (-48) [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994]</p> <p>10月30日、ルイ・フィリップ、クロゼルにアルジェリアの実質的支配を行う許可を与える [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,585]。</p>
1831年		<p>1月4日、フランス軍オラン占領、ハサン・ベイは辞任し亡命。だが、オランの旧トルコ体制の軍事力は減少しなかった [Danziger 1977,59]。</p> <p>1月31日、ベルトゼース将軍、クロゼルの後任となる [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,87]。</p> <p>2月6日、アルジェリアにおけるフランス軍総司令官、クロゼル将軍、政府の許可なくチュニズのベイ・フサインと条約締結 [Danziger 1977, 41]。第一の条約では、チュニジアにコンスタンティーンのベイ管轄地の支配権を与え、第二の条約ではオランにフランス傀儡のベイをおくものとした [アージュロン 2002,19]</p>	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1831年	<p>3月、ムフィッディーンは、地方の名士の申し出を受け入れ、ジハードの長となった[Danziger 1977,60]。</p> <p>ムフィッディーン、公式にオラン州でのモロッコの代理人となった [Danziger 1977,60]。</p>	<p>2月5日、チュニジアのハイルッディーン、オランのベイに任命される [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,86]。</p> <p>3月、モロッコ、トレムセンのムーレイ・アリーと彼の部隊をモロッコに召還。オラン州への最初の介入が終了、再び無政府状態に [Danziger 1977,44: 60]。</p> <p>4月28日、チュニジア軍、オランでの殺戮と略奪によりオラン州への支配権獲得の機会を失う [Danziger 1977,41]。</p> <p>8月22日、クロゼルとフサイン・ベイとの新たな協定締結不可能により、チュニジア軍、チュニスに帰還 [Danziger 1977,41]。</p> <p>8月16日、モロッコのムーレイ・アブドゥッラフマーン、ムハンマド・イブン・ハムリをハリーフアとして、オランへの第二回軍事的介入 [Danziger 1977, 44]。</p> <p>10月8-12日、イブン・ハムリ、オランのフランス軍駐屯地を攻撃 [Danziger 1977,44]。</p> <p>9月14日、ムハンマド・アリーの旧砲兵隊指揮官ボワイエ將軍、オランの指揮官に任命される [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,586]。</p> <p>12月1日、「アルジェリア」の名称がフランスの公式文書に初めて登場 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,94]。</p>	<p>6月、フランスのカジミール・ペリエ内閣アルジェ州の全面占領の意志表明 [アージュロン 2002,18]。</p>

抗仏運動期

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1832年	<p>4月、ムファイッディーン、オラン全域におけるモロッコのスルターンのハリーフア位を授与され、オラン州におけるスルターンのハリーフアであるイブン・ハムリはモロッコに帰還 [Danziger 1977,60]。</p> <p>4月初旬、マスカラ近郊で大規模な集会。ムファイッディーンはジハードの長となるも、アミール位受諾を高齢を理由に拒否 [Danziger 1977,61]。</p> <p>4月17日、ムファイッディーン、フランス軍を攻撃。ガラバの部族間の対立終結を目的として、フランス軍を攻撃した。ジハード遂行と戦いで犠牲者への復讐を扇動した [Danziger 1977,61]。</p> <p>4月23, 24日、ムファイッディーン、マスカラとオランの間の部族を大規模に召集しジハード遂行と戦いで犠牲者の復讐を呼びかけた [Danziger 1977,61]。</p> <p>5月3-8日、ムファイッディーン、オランにたてこもるフランス軍を執拗に攻撃。アブドゥルカーデイル、ムファイッディーンの戦いにおける戦闘を指導。ムファイッディーンの後継者であることを示す最終段階であった [Danziger 1977,62]。</p> <p>8月31日、ムファイッディーン、オランのフランス駐屯地を攻撃 [Danziger 1977,62]。</p> <p>9月19日、ムファイッディーン、オランのフランス駐屯地を攻撃 [Danziger 1977,62]。</p> <p>10月23日、ムファイッディーン、オランのフランス駐屯地を攻撃 [Danziger 1977,62]。</p> <p>11月10日ムファイッディーン、オランのフランス駐屯地を攻撃 [Danziger 1977,62]。</p> <p>11月22日、アブドゥルカーデイル、父の推挙と西部三大部族(ハーシム、ベニ・アメル、ガラバ)の承認を受け、エグリス高原エルシビアでの集会において、信徒たちの長(アミール・アル＝ムウミニーン)となる [Danziger 1977,51]。</p> <p>11月25日、アブドゥルカーデイル、マスカラ占領。ペイの城館に政府を置き、大モスクでフトバを行った [Danziger 1977, 73]。</p>	<p>3月23日、フランス部隊によってボーンのカスバが占拠される [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,586]。</p>	<p>エジプト、シリア征服。イブラヒム・パシャの統治のもと、ムハンマド・ハーニーは多くのハリディー教団のシェイフがダマスカス退去を命じられるなかで、教団における主要な位置を保つことができた [Weismann 2006,82]。</p>

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1832年	11月27日、アブドゥルカーディル、マスカラの大モスクにおいて名士たちを前にバイアを行う。正統ハリーフアの伝統に従って正統的なイスラームの支配者として自らを位置づけようとした [Danziger 1977,72]。	11月26日、ボワイエ將軍、アブドゥルカーディルが権力の座についたことを知る。だが、彼の地位はトルコ政体のベイであると認識 [Danziger 1977,73]。	
1833年	2月4日、アブドゥルカーディル、マスカラで2回目のバイア。2月までにオランの部族がアブドゥルカーディルに対して献納 [Danziger 1977,76:80]。 4月13日 アブドゥルカーディル、沿岸都市アルズウを占領、フランスに協力した罪でカーディーのアフマド・ベン・ターヒルと部下をマスカラに送り処刑 [Danziger 1977,80]。 7月、アブドゥルカーディル、旧トルコの軍人階級であるクルグリの占拠するメシユアー（城壁）を除くトレムセンを支配 [Danziger 1977,81]。 7月20日、アブドゥルカーディルの父、ムフィッディーン死去 [Danziger 1977,78]。 10月20日、デミシエル將軍、ボルジャ族によって拘束されたフランス人捕虜の返還を求めて、アブドゥルカーディルに初めてフランス側からの手紙を送る [Danziger 1977,88]。 12月6日、デミシエル將軍、アブドゥルカーディルに和平を提案 [Danziger 1977,88]。	4月23日、デミシエル將軍がオランでのボワイエの後任となる [Danziger 1977,81]。 7月4日、フランス、オランの東沿岸のアルズウ支配 [Danziger 1977,81]。 7月29日、フランス、沿岸のムスタガネム支配 [Danziger 1977,81]。 9月29日、4日間の戦いの後、トレゼル將軍、沿岸のブージー占領 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,586]。	
1834年	1月10日、デミシエル、アブドゥルカーディルに再び手紙 [Danziger 1977,88]。 1月20日、アブドゥルカーディル、デミシエルの手紙に返答 [Danziger 1977,88]。		シャールミル、ダゲスタンで第3代イマームに就任、対ロシアのジハードを進める [大塚和夫ほか,2002,1095]。

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1834年	<p>2月26日 デミシエル将軍とアブドゥルカーデイル、平和協定締結（公式のデミシエル協定）。アブドゥルカーデイルの「信徒たちの長」がアルジェリアにおける最高権限をもつことが認められる一方、オラン全域がフランスに服従することとされた [Danziger 1977,91]。</p> <p>3月、秘密のデミシエル協定。アブドゥルカーデイルのオラン全域の主権を認めた [Danziger 1977,91]。だが、キリスト教徒との和平によって、アブドゥルカーデイルはジハードの長としての立場を失う [Danziger 1977,94]。</p> <p>4月12日、アブドゥルカーデイル、トレムセン近郊で、ムスタファー・イブン・イスマイルの部隊に夜間を襲撃される。彼はほぼ単独でマスカラまで逃亡した。彼にとって初めての敗北であり、対立する部族の同盟を招いた [Danziger 1977,96] [Azan 1925,30]。</p> <p>6月、アブドゥルカーデイル、ボルジャ族の反乱にフランス側の通訳アブドゥッラー・アスポンヌの指導のもと編成した常備軍を用い勝利 [Danziger 1977,97]。</p> <p>7月12日 アブドゥルカーデイル、フランス軍の助力により、ムスタファー・イブン・イスマイルに、マハーラズ高原で勝利 [Danziger 1977,97]。彼の国家にダワイル族とズマラ族を統合 [Danziger 1977,114]。</p> <p>アブドゥルカーデイルのライバル、東部に勢力をもつスィーデー・ラルビ、アブドゥルカーデイルと和睦を望む一方、トレムセンのトルコ人を支持したとして、捕らえられ獄死 [Azan 1925,34]。</p> <p>1834年末までに、アブドゥルカーデイルの主要な敵は消滅。アブドゥルカーデイルは、オラン州を東(マスカラを首都として7つのアガリク)西(トレムセン首都、5つのアガリク)に分割し、行政機構を整備 [Danziger 1977,98]</p>	<p>3月、アブドゥルカーデイルとの協定締結が陸軍省に報告された [Danziger 1977,92]。</p> <p>7月22日、王室勅令によりフランスの北アフリカ領有が決定され、アルジェ総督府が設立された [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,586] [Danziger 1977,101]。</p> <p>7月29日 ドルーエ・デルロン将軍、総督府の落成式を行う。彼が総督となった [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,586]。</p>	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1834年	アブドゥルカーディル、総督に対し、デミシエル協定が保証する、アルジェリア中央部ティトゥリーと東部コンスタンティーンスの支配の意向を伝える。だが、総督デルロンは彼にはその権利がないと返答 [Azan 1925,36]。		
1835年	<p>4月15日、アブドゥルカーディル、アルジェ近郊の都市、ミリアナ支配 [Danziger 1977,]。</p> <p>4月22日、アブドゥルカーディル、フランスに対するジハードを宣言し、彼への服従を命じたダルカーウィー教団マラブー、ハーッジ・ムーサに勝利。アブドゥルカーディルはデルロンの通行禁止令を無視し、旧ティトゥリー県に進軍 [Danziger 1977,105]。</p> <p>4月24日、アブドゥルカーディル、ティトゥリー州のアルジェ近郊都市、メデア占領 [Danziger 1977,115]。</p> <p>6月26日、ムーレイ・イスマイルの森での戦い、トレゼル將軍、アブドゥルカーディルに勝利 [Danziger 1977,117]。</p> <p>6月28日、オラン東部でのマクタ河岸の戦い、マフザン族と組んだトレゼル、アブドゥルカーディルに敗北。フランスのアルジェリア支配において最悪となる大敗北であった [Danziger 1977,117]。</p>	<p>2月、トレゼル將軍がオラン地方の司令官としてデミシエル將軍の後任となる [Danziger 1977,101:102]。</p> <p>3月、トレムセンのムスタファー・イブン・イスマイル、トレゼル將軍に対してアブドゥルカーディル攻撃への協力の意向を伝えた。トレゼルは申し出を辞退 [Azan 1925,37:38]。</p> <p>6月16日、トレゼル、トルコのデイ体制に仕えていたマフザン族のダワイル族とスマーラ族の首長との間で、協定に署名。アブドゥルカーディルの軍事力が減少 [Danziger 1977,116]。</p> <p>6月27日、アルズウのハリーフア、イブン・ムハンマド死亡。彼はアルズウ港でのアブドゥルカーディルの貿易独占を支えていた [Danziger 1977,100]。</p> <p>7月8日、ドルーエ・デルロン召還、後任にクロゼル。12日にオランのトレゼルの後任にダランジュ [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,587]。</p>	<p>オスマン帝国、リビヤのカラマンリー朝を滅亡させる [Martin 1976,99]。</p>

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1835年	<p>9月23日、アブドゥルカーデイル、イギリス国王に対して援助を求める手紙を、モロッコのイギリス領事を通じて送った [Azan 1925,60]。</p> <p>12月3-4日、アブドゥルカーデイル、フランスに敗北。ハシム族、ガラバ族、ベニ・アマール族が彼を裏切る [Danziger 1977,121-122]。また、エル・メザリが戦線を離脱し、ムスタガネムのベイ・イブラヒムとフランス軍に与した [Azan 1925,67]。</p> <p>アブドゥルカーデイル、マスカラ占領によって、ハーシム族に裏切りの言葉を浴びせられ、彼の所有物は奪われ破壊された [Azan 1925,65]。彼はモロッコのスルターンの庇護に入ろうとしたが、フランスのマスカラ放棄を知った部族に引き止められ奪われたものは返還された。この頃からアブドゥルカーデイルは、権威の象徴を用いることをやめ、厳しいほど簡素な生活を実践するようになった [Azan 1925,67]。</p>	<p>10月20日、クロゼル、アブドゥルカーデイルの補給地の一つラシュゲン島占領 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,587]。</p> <p>11月28日、11000名の兵士を伴って、クロゼル元帥、遠征開始。王位継承者、オルレアン公が同伴した [Danziger 1977,121]。</p> <p>12月6日、フランス軍、マスカラを占領、12月9日放棄 [Danziger 1977,121:122]。</p>	
1836年	<p>1月11日、アブドゥルカーデイル、イギリスに、アルジェリアの港の独占的使用を許可、フランスとの仲介としての役割を求める手紙を送るが断られる [Danziger 1977,125]。</p> <p>1月27日、3000名のモロッコ軍兵士がアブドゥルカーデイルの軍に合流 [Danziger 1977,124]。</p> <p>3月、アブドゥルカーデイル、アメリカにアルジェリアでの開港を提案する手紙を送り、断られる [Danziger 1977,125]。</p>	<p>1月8日、フランス軍、オランからトレムセンに向かう [Danziger 1977,122]。</p> <p>1月12日、クロゼル、ムスタファー・イブン・イスマイルとトレムセンで対面、協力を約束 [Azan 1925,68]。</p> <p>1月13日、フランス、トレムセン占領 [Danziger 1977,122]。</p> <p>4月、ダルランジュ將軍、タフナ河口に野営地を設置 [Danziger 1977,124]。</p>	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1836年	<p>7月6日、アブドゥルカーディル、ピュジョー将軍に、シッカークの戦いで大敗北した。しかしながら、常備兵と非常備兵合わせて1万名を総動員したアブドゥルカーディルにとって唯一、準備万端の戦いであった [Danziger 1977,126]。</p> <p>アブドゥルカーディル、フランス軍の攻撃を避けるため、内陸のターグダームトに首都移転、マスカラから人々を移住させた [Danziger 1977,127]。</p> <p>9月、モロッコから、ターグダームトのアブドゥルカーディルに物質援助 [Danziger 1977,128]。</p> <p>12月24日、アブドゥルカーディル、最初フランス国王との交渉を求めたが、拒否されたため、フランスとの間接的和平予備交渉を総督との間で行った [Danziger 1977,129]。</p>	<p>5月23日、陸軍省、ピュジョー将軍をアルジェリアに派遣し4500の兵力を追加 [Danziger 1977,126]。</p> <p>8月10日、レタン将軍、オランでダルランジュの後任に就任 [Aouli, Redjala& Zoumeroff 1994,587]。</p> <p>11月21日クロゼル、コンスタンティーン支配を試み失敗 [Aouli, Redjala& Zoumeroff 1994,587]。</p>	
1837年	<p>1月、アブドゥルカーディル、代理人のデュランをフランス側のプロッサール将軍に送り、補給を要請 [Danziger 1977,130]。</p> <p>2月8日、アブドゥルカーディル、アルジェリア人捕虜解放を条件として、フランス人捕虜5名を釈放するとの手紙を送る [Danziger 1977,129]。</p> <p>5月30日、ピュジョー将軍とアブドゥルカーディルがタフナ協定に署名 [Danziger 1977,139]。</p> <p>6月1日、ピュジョーとアブドゥルカーディルの最初で最後の会見がタフナ河岸で行われた [Bouyerdene 2008,65]。</p> <p>7月12日、アブドゥルカーディル、トレムセン占領。300名の優秀なクルグリ兵を徴集し、残りはターグダームトに追放した [Danziger 1977,152]。</p>	<p>1月13日、プロッサール将軍、オランでレタンの後任に就任 [Aouli, Redjala& Zoumeroff 1994,587]。</p> <p>2月12日、クロゼルの後任で、ダンレモンが総督に任命される [Aouli, Redjala& Zoumeroff 1994,587]。</p>	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1837年	<p>8月、アブドゥルカーディル、南部に遠征開始、遊牧部族を服属させることに成功、長を任命し徴税させた [Danziger 1977,153]。</p> <p>10月9日、アブドゥルカーディル、元アメリカ領事のイタリア人商人ガラヴァニを、アルジェでの代理人とする意向をフランスに打診。だがフランスは容認せず [Danziger 1977,154]。</p> <p>11月、フランス軍の公式通訳であったレオン・ロッシュが、アブドゥルカーディルのもとに逃亡。行政改革などを導入し、軍部と部族への支配力を高めた [Danziger 1977,158]。</p> <p>12月、アブドゥルカーディル、アルジェリア東部を占領 [Danziger 1977,263]。</p>	<p>10月13日、フランス、コンスタンティーン占領、戦死したダンレモンに代わり総督となったヴァレ元帥、コンスタンティーンに駐屯地を築く。フランスの内陸への拠点確保はアブドゥルカーディルの内陸支配の終了を意味した [Danziger 1977,153:154]</p> <p>12月10日、陸軍省、ヴァレ総督にアルジェリア全面的占領を指示 [Danziger 1977,156]。</p>	<p>10月21日、イドリース、イエメンのサバで死去 [Vikor 1995,118]。</p> <p>チュニジア、アフマド・ベイ即位。近代的改革開始 (-55) [Clancy-Smith 1997,157]。</p>
1838年	<p>1月5日、アブドゥルカーディル、東部沿岸のザイトウンのクルグリ共同体を攻撃し敗北させた [Danziger 1977,159]。</p> <p>3-5月、アブドゥルカーディルの代理人、マウルド・ベン・アラシュがパリ訪問。代議士を買収し、アルジェリア支配を放棄させる狙いがあった [Danziger 1977,156]。</p> <p>5月、アルジェからアブドゥルカーディルのもとに移民700名 [Danziger 1977,155]</p> <p>6月11日、アブドゥルカーディル、ティジャーニー教団の拠点、南部のアイン・マフディーに向かう [Danziger 1977,162]。</p> <p>6月28日、ベン・アラシュ、アルジェに帰還 [Azan 1925,147]。</p>	<p>1月25日、ラバテル将軍、オラン地方の指揮官となる [Aouli, Redjala& Zoumméroff 1994,587]。</p> <p>3月26日、フランス、アルジェ西のコレアを占領。ミリアナにおけるアブドゥルカーディルのハリーフア、ベン・アラルはフランス支配を拒否 [Azan 1925,132]。</p> <p>5月3日、フランス、ミティージャ高原のプリダを占領 [Danziger 1977,263]。</p> <p>ダルカーウィー教団のムーサー・イブン・アフマル、南部ラグワートで教団を率いて抗仏運動 [Vikor 1995,77]。</p> <p>7月4日、ベン・アラシュ、ヴァレ元帥との間で、フランスの領土をコンスタンティーンまで認めるという、タフナ協定の改定協定に、アブドゥルカーディルの同意なく署名を強制される [Azan 1925,147]。</p>	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1838年	<p>10月、アブドゥルカーディル代理人ハーッジ・タハル、モロッコからマスカラまでイギリス製の戦闘用具を護送 [Danziger 1977,169]。</p> <p>11月16日、アブドゥルカーディル、レオン・ロッシュの助言により機雷と火薬によってアイン・マフディー爆破 [Danziger 1977,162]。</p>	<p>8月25日、デュピュシュ神父、アルジェ初の司教に [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,587]。</p> <p>9月1日、ゲースク将軍、ラパテルの後任に [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,588]。</p> <p>10月7日、フランス、東部の港のストラとフィリップヴィルを支配 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,588]。</p> <p>12月1日、ヴァレ将軍、アルジェリア新総督に就任 [Bouyerdene 2008,321]。1871年に抗仏運動を起こすこととなるムクラニーの父は、反アブドゥルカーディルの立場をとりヴァレに大カピール地方のハリーフアとして任命された [Abun-Nasr 1987,267]。</p>	<p>8月、イギリス=オスマン帝国通商条約締結 [中岡 1991,55]。</p> <p>11月、フランス=オスマン帝国通商条約締結 [中岡 1991,55]。</p>
1839年	<p>1月12日、アブドゥルカーディル、アイン・マフディー占領 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,264]。 [Danziger 1977, 162]。しかしティジャーニー教団がフランスと同盟したため、占領の維持が不可能となった [Martin 1976,62]。</p> <p>3月、ハーッジ・タハル、ジラルタルにてイギリス製の拳銃 600丁購入 [Danziger 1977,169]。</p> <p>4月15日、アブドゥルカーディル、フランス国王ルイ・フィリップに、タフナ協定の改定を認めない考えを手紙で訴えた [Azan 1925,147]。</p> <p>6月、アブドゥルカーディル、カピール山地に遠征し、コンスタンティーヌ州に侵入。だが、その地のベルベル族は、納税を拒否し、フランス軍から攻撃があったときにしかジハードに参加しないと主張した [Danziger 1977,167:168]。</p> <p>6月、アブドゥルカーディル、預言者ムハンマドと数回会ったとの神秘体験を公表 [Danziger 1977, 181]。</p> <p>7月3日、アブドゥルカーディル、旧ティトゥリーのタザにてハリーフアを集結させジハードを宣言した [Danziger 1977, 170]。フランス人入植地や農園の破壊が決定された [Azan 1925,154]。このとき彼は、モロッコ権力によって送られたカフタンを着用していた [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,260]。</p>	<p>3月3日、サレ指揮官の使節団、タフナ協定の改定条項の批准を求めて、アブドゥルカーディルとの交渉失敗 [Azan 1925,149]。</p> <p>5月13日、フランス軍、東部の港ディジェリの占領 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,588]。</p>	<p>エジプト軍シリアから撤退、エジプト側に参加していた、ムハンマド・タンターウィー、ダマスカスに残留しナクシュバンドゥー教団の修行を行う [Weismann 2006,82:205]。</p>

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1839年	<p>10月28日、オルレアン公とヴァレ、アブドゥルカーデイルの管理下に置かれていた山岳地帯の関門ビバーン（鉄の扉）を超えた。アブドゥルカーデイルは、そのことを会戦理由とした [Bouyerdene 2008,321]。</p> <p>11月20日、アブドゥルカーデイルの非常備軍、アルジェ近郊のミティージャ高原において、フランスの入植地を襲撃、農地を破壊した。アブドゥルカーデイルとフランスとの戦争の再開 [Danziger 1977,171,224]。</p> <p>12月13日、マスカラのハリーフア、ベン・サミ、ムスタガネム近郊マザグランを攻撃 [Azan 1925,159]。</p> <p>12月17日、トレムセンのハリーフア、ブー・ハムデイによるアルズウへの攻撃 [Azan 1925,159]。</p> <p>12月31日、ウエド・アレグの戦い、アブドゥルカーデイルの軍は敗北。フランスによるブリダ占領が決定的となった [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,281:588]。</p>	<p>10月14日、フランスによって、アルジェリアの名称が公式に制定された [Danziger 1977,171]。</p> <p>10月26日、ヴァレ総督とオルレアン公、コンスタンティーンからアルジェへの通過を決定 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,588]。</p> <p>11月20日、ヴァレ総督、アブドゥルカーデイルからの戦争再開の手紙を受け取る [Azan 1925,158]。</p>	<p>11月3日、オスマン朝、ギュルハネ勅令（タンズィマート開始）。ムスタファー・レシト・パシャ外相によって起草、帝国の威信回復を目的とした近代化改革 [中岡 1993,60]。</p> <p>11月16日、チュニスで、アブドゥルカーデイルのもとに送る目的の船積みの火薬が爆発 [Danziger 1977,169]。</p>
1840年	<p>1月、アブドゥルカーデイル、モロッコのスルターンに物資の援助を求める手紙を送る [Azan 1925,162]。</p> <p>2月8日、イギリスに対して、戦争協力を求める手紙をタンジェの英領事を通して送る [Azan 1925,163]。</p>	<p>3月までに、ヴァレ、40,000から58,000名まで兵力を動員 [Danziger 1977,224]。</p> <p>3月15日、ヴァレ、アルジェ西のシエルシエル港占領 [Danziger 1977,225]。</p>	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1840年	<p>4月、ムザブ地方のハリーフア、ラフマーニー教団のハリーフア、ブー・アッズーズ、フランスによって南部支配権を与えられていたベン・ガナ族によって攻撃され敗北 [Azan 1925,167]。</p> <p>5月12日、テニア峠の戦い。ヴァレの部隊、峠を砦としたアブドゥルカーディル軍に苦戦し、オランからの援軍とともにテニア峠通過 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,286]。</p> <p>5月20日、アブドゥルカーディル、メデアから帰還中のヴァレを攻撃 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,287]。</p> <p>6月12日、アブドゥルカーディルの部隊、ラルバ・ジュンデルで、ヴァレの軍を攻撃 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,288]。</p> <p>6月15日、ムーザイア峠の戦い [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,288]。アブドゥルカーディル側に、30名の死者,300名の負傷者が出る。</p> <p>12月31日、アブドゥルカーディル、戦いで部下にフランス軍との衝突を避け交通を遮断し、小戦闘で悩ませるよう指示した [Danziger 1977,225]。</p>	<p>5月17日、ヴァレ、メデア占領 [Danziger 1977,225]。</p> <p>5月21日、フランス、ブリダを占領 [Azan 1925,165]。</p> <p>6月9日、フランス、ミリアナ占領 [Danziger 1977,225]。</p> <p>9月17日、シャンガルニエ將軍、ムスタファー・カラ高原で、ベン・サレムに対し勝利 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,588]。</p> <p>9月18-24日、ハッラクタ族に対するガルボワ將軍の遠征。旧コンスタンティーヌのベイ・アフマドをとらえる目的があった [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,291]。</p>	
1841年	<p>5月25日、フランス、アブドゥルカーディルの首都、ターグダームト占領、要塞、武器工場を破壊 [Danziger 1977,225]。</p>	<p>2月22日、ピュジョー將軍がアルジェに到着しヴァレ総督と交代,78000の兵力を動員 [Azan 1925,169]。限定占領から全面占領に方針転換 [アージュロン 2002,27]。</p> <p>ティトゥリーの都市、ボガール (5月23日)、タザ (5月25日)、バラギー・ディリエ將軍によって破壊 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589] [Danziger 1977, 225]。</p>	

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1841年	<p>アブドゥルカーデイル、スマラ(移動集落)を建設した[Danziger 1977,226]。</p> <p>10月12日、フランス、アブドゥルカーデイルの生誕の地、ゲトナを占領。16日、ユースフ大佐によって破壊された[Bouyerdene 2008,322]</p> <p>12月10日、アブドゥルカーデイル、イギリス側と通商協力をとりつけることに成功したため、オスマン帝国に援助を求める[Martin 1976,58]。手紙をアブデュルメジド、大ワズィール、パシャ、ラシード・パシャ宛てに送った[Azan, 1925,174]。</p>	<p>5月29日-6月11日、ネグリエ将軍、ビバーンのムージラに遠征[Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>5月30日、フランス、マスカラ占領[Danziger 1977,225]。</p> <p>6月10日-25日、ビュジョー、マスカラの駐屯部隊を補強、エギリス高原獲得を計画[Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>10月22日、ビュジョー、西部内陸のサーイダに到着。都市は住民が退去しアブドゥルカーデイルによって焼き払われていた[Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>11月5日、ビュジョー、マスカラをラモリシエール、ムスタガネムをベドー、オランをテンプールに任せた。ラモリシエールは司令官としての能力に優れ、現地の言語や慣習にも順応していたため成功が期待された[Azan 1925, 173]。</p> <p>12月2日、ラモリシエール将軍、オランとムスタガネムへの指令のため、マスカラに軍事作戦本部を設立[Azan 1925,176]。</p>	<p>8月はじめ、サヌースイー、リビヤのキレナイカに移動[Vikor 1995,137]。</p> <p>8月、レオン・ロッシュュ、チュニジアのカイラワーンに向い、ティジャーニー教団のムカッダムからアルジェリア人がフランスに降伏することを許可するファトワーを得る。さらにこれをカイロ、ターイフ、マッカでも認めさせる[Azan 1925,181:182]。</p>
1842年	<p>1月24日、ビュジョー、アブドゥルカーデイルが放置したトレムセンを占領。都市はベドー将軍の指揮下に置かれた[Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p>	<p>2月1日、ビュジョー、トレムセン占領[Danziger 1977, 264]。</p>	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1842年	<p>アブドゥルカーディル、モロッコ国境まで撤退し、同地の部族を徴兵 [Danziger 1977,228]。</p> <p>3月15日、アブドゥルカーディル、短期間モロッコに逃亡 [Danziger 1977,264]。</p> <p>3月20-21日、アブドゥルカーディル、モロッコ人の合流隊とシッカークでベドーを攻撃する [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>4月29日、アブドゥルカーディル、バープ・タザにおいてベドーに敗北 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589] [Bouyerdene 2008]。</p> <p>9月30日 - 10月10日、ピュジョー、アルジェ東部のハリーフア、ベン・サレムを攻撃。ベン・サレムはなんとか持ちこたえた [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>11月25日 - 12月12日、ピュジョー、アブドゥルカーディルを捕らえる目的で、彼の最後の砦、ワルセニスに遠征 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。 [Danziger 1977,229]。</p>	<p>2月1日 - 3月28日、ラモリシエール、マスカラ地域のハーシム族に対する一連の軍事行動を企てる [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>3月6日、ベドー、アブドゥルカーディルの軍へ、ムスタファー・イブン・イスマイルとベニ・アマル族の部隊を率いて攻撃 [Danziger 1977,228]。</p> <p>3月8日、ベドーの部隊、ネドロマに侵入 [Danziger 1977,228]。</p> <p>9月、ベン・サレムのアガ、ムハンマド・ベン・ムフィッディーン、コマン大佐に与する [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>年末、バラギー・ディリエ、ネグリエに代わってオラン州を引き継ぐ [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p>	<p>リビヤでアウラード・スレイマーン族、オスマン帝国に対して反乱。多くの部族がサハラ以南に移動し、交易と政治が長期にわたり断絶した [Vikør 1995, 147]。</p>
1843年	<p>1月30日-2月7日、アブドゥルカーディル、ピュジョーとのワルセニス地方での戦い。非常に厳しい戦いで、ピュジョーは危うく戦死しかけた [Bouyerdene 2008,322]。</p>	<p>2月中旬-3月3日、シェリフ溪谷でのベニ・メナセルの反乱に対する多数の遠征 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>3月24日、フランス、アルジェリアのハブース地 (ワクフ地) をフランス国有地として没収 [アージュロン 2002,v]</p>	

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1843年	<p>4月30日、ビュジョー、アブドゥルカーデイルの最後の港、テネスを占領 [Azan 1925,183]。</p> <p>5月16日、王位継承者ドーマル公、アブドゥルカーデイルのスマラを拘束、3000人を捕虜にし、アブドゥルカーデイルの財産や戦利品を奪った。[Danziger 1977,230] [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>テンブール大佐の部隊との戦い、アブドゥルカーデイルは11月11日、アブドゥルバキ、ベン・アラールという重要な部下を相次いで失う [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p>	<p>4月26日、ビュジョー、ムスタガネムとミリアナの間地点であるエル・アスナムに、恒久的な野营地建設 [Danziger 1977,229]。</p> <p>5月23日、アブドゥルカーデイルの強敵、ムスタファー・イブン・イスマイル、スマラに居住していたハーシム族によって殺害された [Azan 1925,190:191]。</p> <p>ビュジョー、元帥に任命される [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,589]。</p> <p>9月22日、スィーディー・ユーセフにおいてアブドゥルカーデイルの部隊と、モリス大佐に指揮されたラモリシエールの部隊との間での小戦闘 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p> <p>12月4日、ドーマル公、コンスタンティーンでの支配権を掌握 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p>	
1844年		<p>2月、フランス側統治者とアルジェリア原住民指導者との仲介機関としてアラブ局設立 [アージュロン 2002,33]。</p> <p>3月4日、ドーマル、ジバーン地方の都市ビスクラを占拠し、ベン・ガナ族の権力回復 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p> <p>4月17日-5月8日、ドーマル、アフマド・ベイが避難しているウレド・ソルタネへ遠征 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p> <p>4月、フランス、モロッコ国境のララ・マグニアに軍事野营地建設 [Danziger 1977,231]。</p> <p>4月末、ビュジョー、ベン・サレムに対する遠征隊を組織 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p>	

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1844年	<p>5月11日、ベン・サレムとピュジョー、ボルジ・メナイエル近郊で衝突 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p> <p>9月10日、フランス、モロッコとのタンジェ和平条約締結。アブドゥルカーデイルに対する援助をせず、彼がモロッコの法律に違反しているとし、拘束されたときについての取り決めがなされた [Azan 1925,202]。</p> <p>9月末、コマン将軍、ベン・サレムに対するカビール遠征 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p>	<p>モロッコ、フランスにララ・マグニアから立ち退きを求める最後通牒 [Danziger 1977,231]。</p> <p>ムスタファー・ベン・アッズーズ、アルジェリアからチュニジアのジャリード地方に避難し、ナフタのオアシスでラフマーニー教団のザーウィヤ建設 [Clancy-Smith 1997,xxii]。</p> <p>5月17日、ピュジョー、ベン・サレムへの攻撃を続けながら、タドマイト山岳地帯で激戦 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p> <p>5月、フランス、ララ・マグニア近くでモロッコ軍を敗退させる [Danziger 1977,264]。</p> <p>8月、フランス-モロッコ戦争開始。8月14日、ピュジョー、モロッコに進軍、8月15日、フランス海軍、ジョアンヴィル公指揮のもと、タンジェとモガドールを爆破 [Danziger 1977, 232]。</p> <p>8月14日、ウエド・イスリーにおいてフランス軍、アルジェリア・モロッコ軍敗る。モロッコのアブドゥラフマーン、アブドゥルカーデイルのジハードからの撤退に同意 [Clancy-Smith 1997, xxii]。</p> <p>10月17日、フリッサ・エル・バフルの戦い。コマンの部隊は大勢のカビール人、彼らによって要所が占領され困難に遭遇 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p> <p>10月28日、東部カビール族、アイン・アルビの戦いでピュジョーが介入したフランス軍に敗北 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p> <p>11月16日、ピュジョー、フランスに帰還。代理人にラモリシエール [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,590]。</p>	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1845年	<p>9月24日、アブドゥルカーディル、モロッコから国境を越えて、スィーディー・プライムでフランスを破る [Danziger 1977, 234]。</p> <p>9月27日、200人の兵力がアイン・テムシェンの駐屯部隊に送られ、戦わずしてアブドゥルカーディルの騎兵隊に降伏 [Aouli, Redjala & Zoummeroff 1994, 591]。</p>	<p>1月、モロッコのタイビー教団員といわれる、ムハンマド・ベン・アブドゥッラー、通称ブー・マアザ(ヤギを連れた男)、マフディー宣言、オラン地方で抗仏運動開始 [Martin 1977, 64]。</p> <p>3月18日、ララ・マグニア協定、アルジェリアとモロッコの国境を確定。基本的にトルコ時代の境界線に一致するものであった [Aouli, Redjala & Zoummeroff 1994, 590-591]。</p> <p>3月29日、ビュジョーのアルジェリア帰還。ダフラとシェリフ渓谷でのブー・マアザの蜂起 [Aouli, Redjala & Zoummeroff 1994, 591]。</p> <p>4月14日、サンタルノー大佐、ブー・マアザに対してアイン・ムランで勝利 [Aouli, Redjala & Zoummeroff 1994, 591]。</p> <p>4月15日、アルジェリアの民政地域がフランスの体制に組み込まれた [アージュロン 2002, 36]</p> <p>4月28日、ブー・マアザ、オルレアンヴィル(旧エル・アスナム)攻撃 [Aouli, Redjala & Zoummeroff 1994, 591]。運動がシェリフ渓谷に波及 [Danziger 1977, 233]。</p> <p>5月、ビュジョー、ワルセニス地方とシェリフ渓谷の部族を執拗に攻撃。サンタルノー、ブー・マアザに対するダフラでの攻撃を続けていた [Aouli, Redjala & Zoummeroff 1994,]。</p> <p>6月19日、ベリシエ大佐、ダフラ洞窟にいたウレド・リヤフ族の避難民500名以上を燻殺 [Aouli, Redjala & Zoummeroff 1994,]。</p> <p>9月23日-26日、モンタニヤック指揮官とブー・ハムディとのジャバル・ケルクールでの小戦闘 [Aouli, Redjala & Zoummeroff 1994, 591]。</p> <p>9月、ベニ・メナセル部族のもとに、ブー・マアザを名乗る別の人物が現れ、戦いの際に見捨てられ処刑される [Azan 1925, 217]。</p> <p>10月11日、トレムセン南部での部族蜂起、フランス軍を攻撃。モロッコも加勢していた [Azan 1925, 212]。</p>	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1845年	<p>12月23日テムダの戦い、ユースフ、アブドゥルカーディルを襲撃 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,591]。</p> <p>12月、アブドゥルカーディル、カビール地方のベン・サレムとブー・マアザに加勢 [Bouyerdene 2008,323]。</p>	<p>10月15日、ピュジョー、アルジェリアに新しい部隊と共に東部の蜂起鎮圧のために赴く。彼の兵力は総勢106,000人となった [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,591]。</p> <p>10月18日、ブー・マアザ、ムスタガネムを攻撃 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,591]。</p>	
1846年	<p>2月28日、アブドゥルカーディル、カビール族を結集させ蜂起を呼びかけた [Azan 1925,219]。</p> <p>3月5日、アブドゥルカーディル、カビール地方を蜂起させる試みに失敗 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,591]。</p> <p>3月7日、アブドゥルカーディル、ボガールとバルーアギアの間でフランスに服従した部族に遭遇 [Azan 1925,220]。</p> <p>3月13日、アブドゥルカーディル、ユースフにタグワン南西のグイガの野営地を襲撃される [Azan 1925,220]。</p> <p>春、アブドゥルカーディル、フランス軍に追跡され、アウラード・ナール族とアウラード・スィーデー・シャイフ族のもとに身を寄せ、モロッコに逃亡 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,591]。</p> <p>3月6日、ベン・アラシユ、アブドゥルカーディルのもとを離れ、フェズに移動 [Azan 1925,222]。</p> <p>4月27日、アブドゥルカーディルの部下、ムハンマド・ベン・サミ、スィーデー・プライムでの戦いのフランス人捕虜270名の死刑を執行 [Danziger 1977,]。</p> <p>7月18日、アブドゥルカーディル、モロッコのフィギグに到着。ブー・マアザも合流 [Azan 1925,221:225]。</p>	<p>2月6(7)日、ジョンティル将軍、ベン・サレムの野営地を攻撃 [Azan 1925,219]。</p> <p>2月10日、レオン・ロッシュ、モロッコのスルターンとフランスとの間の仲介者になる [Azan 1925,224]</p>	<p>ダマスカス北部サーリヒーヤ地区に、スルターン・アブデウルメジド出資によりハーリド・ナクシュバンディーの廟・修道場が完成 [Weismann 2006,90]。</p> <p>ダマスカスのムハンマド・ハーニー、ダマスカス統治者であったナクシュバンディー教団員の支援を確保 [Weismann 2006,91]。</p> <p>アメリカ合衆国、アイオワ州北東にアブドゥルカーディルの名を冠したエル・カデル市が創立される [Fondation Emir Abdel kader 1998,17]。</p>

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1847年	<p>2月27日、アブドゥルカーディルの最後のハリーフア、ベン・サレム、フランスに降伏 [Danziger 1977,235]。400名ものカビールの人々とともにダマスカスに移住。彼はその後ダマスカスで軍事的な職務に従事 [Weismann 2006,195:196]。</p> <p>6月6日、アブドゥルカーディル、彼を攻撃しに来たスルターンの甥、ムーレイ・ハサン率いるモロッコ軍を破る [Danziger 1977,236]。</p> <p>アブドゥルカーディルの義理の兄弟ハーッジ・ムスタファー、フランスに降伏 [Danziger 1977,237]。 12月20日、アブドゥルカーディル、部隊とともにアルジェリアに戻る [Danziger 1977,265]。 12月21日、アブドゥルカーディル、ラモリシエール将軍に降伏 [Danziger 1977,237]。 12月24日、アブドゥルカーディル、愛馬をドーマル公に譲る [Bouyerdene 2008,84]。 12月25日、アブドゥルカーディルと一行100名、ジャム・ガザウエトにてフランスの軍艦アスモデー号に乗船 [Bouyerdene 2008,324]。</p>	<p>1月25日 - 3月14日 エルピヨン将軍、ブー・マアザ討伐のため、諸部族の土地に長期侵入 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,592]。</p> <p>4月13日、ブー・マアザ、フランスに降伏（パリに滞在后、オスマン部隊の職務に） [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,592]。 5月、ピュジョー、カビール遠征 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,592]。 6月5日、ピュジョー、アルジェリア総督府辞職 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,592]。</p> <p>8月、モロッコの軍隊、モロッコに留まるベニ・アマル族、ハーシム族を壊滅させた [Danziger 1977,236]。 10月5日、ドーマル公、アルジェ到着、アルジェリア新総督となった [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,592]。</p>	

抗仏運動後

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1848年	<p>1月、アブドゥルカーディル一行、トゥーロンに到着、ラマルグの要塞に拘留された [Bouyerdene 2008,324]。</p> <p>1月17日、フランス、アブドゥルカーディルの帰趨について両院での協議 [Bouyerdene 2008,324]。</p> <p>2月5日、フランス内務省、アブドゥルカーディルをサン・ジャン・ダクトル、アレクサンドリアのいずれにも移送しないことを表明。オスマン帝国は、アルジェリアの占領を知らされていないという理由であった [Bellemare 1863,353]</p> <p>3月14日、アブドゥルカーディル、フランスに対して一切の政治的役割の放棄を宣言させられる [Bouyerdene 2008,92]。</p> <p>4月23日、アブドゥルカーディル一行、トゥーロンから、ポーのアンリ4世城に移送された [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,592]。</p> <p>11月8日、アブドゥルカーディル一行、アンボワーズ城に移送された [Bouyerdene 2008,324]。</p>	<p>2月末、東部内陸のビスクラの人々は、フランスの二月革命を知り、解放の好機ととらえた [Clancy-Smith 1997,97]。</p> <p>3月、アルジェ・コンスタンティーン・オランをフランスの3県として編成することが決定され、フランス共和国憲法の第109条にも記載された [Bouyerdene 2008,324]。</p> <p>アルジェリア、ダルカーウィー教団のムーサー・イブン・アフマル、ラグワートで抗仏運動、ムーサー戦死。戦いの理論にはサヌースイーの思想の影響がみられた [Vikør 1995,77]。</p> <p>フランス国内における社会問題解決のため、フランス政府が失業者に対しアルジェリアの土地無償譲渡を行い、2万人がアルジェリアに入植 [アージュロン 2002,40]</p>	<p>2月22-24日、フランス、二月革命、ルイ・フィリップ退位 [服部 & 谷川 1993,117]。</p> <p>2月25日、フランス、共和国宣言 [Bouyerdene 2008,324]。共和国憲法では、アルジェリアはフランスの領土の不可分な一部であると宣言され、本国の法体制のもとに置くことが宣言される [アージュロン 2002,38]</p> <p>フランス、12月10日、ルイ＝ナポレオン、大統領選挙で圧勝 [Bouyerdene 2008,97]。</p>
1849年		<p>5月、アルジェリアのジバーン地方のオアシス、ザアトシャでヤシへの課税に対する反乱。マフデーを宣言した指導者アブー・ザイヤーンはアブドゥルカーディルの一味であり1844年のフランスの侵攻まで地方の長を務めていた [Clanthy-Smith 1997,105]。</p>	<p>ハーッジ・ウマル、西アフリカで彼にとってのリバートとなったデインギラウイヘビジュラを行う [Martin 1976, 81]。</p> <p>6月10日、ピュジョー將軍死去 [Bouyerdene 2008,325]。</p>

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1849年		11月26日、アブー・ザイヤーン、フランス軍に家族とともに殺害される [Mahsas 2006,138] [Clancy-Smith 1997,116]。	
1850年			アブドゥルカーデイルの元ハリーフア、ムスタファー・イブン・アッズーズ、マッカ巡礼を行う。チュニジアやトリポリタニア境界にも信者を獲得していた [Clancy-Smith 1997,138]。
1851年		2月、大カピール山地で、宗教的指導者、ブー・バグラの抵抗運動開始 [Abun-Nasr 1987,264]。 アルジェリア南東のワルカラで、ティジャーニー教団シャイフ、ムハンマド・イブン・アブドゥッラー、フランスに対するジハードを宣言 (-61) [Vikor 1995,213]。サヌースィーが彼にアルジェリアにおいてジハードを行うように説いたと主張、チュニジアから武器や火薬を仕入れていた [Clancy-Smith 1997,165:170]。 9月5日、ベンナスール・イブン・ショフラの抵抗運動の開始 [Mahsas 2006,138]。	6月16日、フランス国民議会、アルジェリア人と入植者の土地の所有権双方を認めた法を公布 [Julien 1979,380]。 12月、ルイ＝ナポレオンのクーデター [Bouyerdene 2008,102]。
1852年	10月16日、ルイ＝ナポレオン、アンボワーズでアブドゥルカーデイルの抑留終了を宣言。アンボワーズ城では環境や衛生状態が悪く、同行者のうち25名が亡くなった [Bouyerdene 2008,98:103]。 10月27日、アブドゥルカーデイル、パリに到着。ボワソネ司令官、旧常備騎兵隊長カラ・ムハンマド、1843年に戦死した部下のベン・アラルの甥シ・カッドゥール・ベン・アラルとともに、夕方にはオペラ座を見学した [Azan 1925,260]。 10月30日、アブドゥルカーデイル、ルイ＝ナポレオンと長時間会見し、マドレーヌ寺院、アンヴァリッド、大砲博物館、国立印刷局を訪れた [Bellmare1863,398]。 11月20日、アブドゥルカーデイル、アンボワーズ市長宛に、アルジェリア人の選挙権を求める手紙を書く [Azan 1925,265]。 12月2日、アブドゥルカーデイル、テュイルリー宮殿でのフランス帝政宣言の場に出席 [Bouyerdene 2008,325]。	12月、ムハンマド・イブン・アブドゥッラー敗北 [Nasr 1987,264]。 12月2-4日、ラグワートでの抵抗運動 [Mahsas 2006,138]。	11月21日、フランス、人民投票で帝政復活支持 [Bouyerdene 2008,325]。 12月2日、ナポレオン3世即位、第二帝政成立 [服部 & 谷川 1993,126]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1852年	12月11日、アブドゥルカーディル一行、アンボワーズ城を去りマルセイユに向かった [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,592]。 12月21日、アブドゥルカーディル一行、蒸気船ラブラドール号でコンスタンティノーブルに向かう [Azan 1925,266]。		
1853年	1月7日、アブドゥルカーディル、コンスタンティノーブルに到着。トプハネで、大砲の一斉射撃の歓迎を受ける [Azan 1925,266]。 1月12日、アブドゥルカーディル、オスマン帝国スルターン・アブデュルメジドと会見する。スルターンは、彼が国と宗教を守ったことを賞賛。およそ10日後、アブドゥルカーディルはブルサに向かった [Azan 1925,266]。	5-6月、アルジェリアの最後の砦となった大カビール地方での、フランス遠征に対する反乱 [Julien 1979,393]。	ハサン・ピータール、スルターン・アブデュルメジドがロシアに対してクリミア戦争を宣言した際、ジハードのための論文を著す。ジハードの正当性を共同体の合意 (イジュマ) に求め、クルアーンとスンナのみを引用 [Weismann 2006,207]。
1854年			3月27日、フランス・イギリス・オスマン帝国、ロシアに対するクリミア戦争宣言 [Bouyerdene 2008,326] ブー・マアザ、クリミア戦争にオスマン帝国側で参戦 [Martin 1976,210]。 9月、サヌースイー、マッカ巡礼 [Vikor 1995,177]。
1855年	2月28日 - 3月2日、ブルサで地震、アブドゥルカーディル、別の住居への入居を要請 [Bouyerdene 2008,326]。 9月8日、アブドゥルカーディル、解放後フランスを初訪問。万国博覧会を見学し、アジア協会会長に『フランス人への手紙』の原稿を手渡す [Bouyerdene 2008,326]。 12月6日、アブドゥルカーディル、ダマスカスに到着、公式に迎えられる。ムハンマド・タンターウィー、ムハンマド・ハーニー (子)、アブドゥルラッザーク・ピータールが彼の主要な弟子となる [Weismann 2006,204]。	8月30日、シェリフ・アブーフマラの指導により、ジュルジュラでの抵抗運動開始 [Mahsas 2006,138]。	
1856年			2月16日、オスマン帝国新憲法、改革勅令発布 [Weismann 2006,12]。 3月30日、パリ条約が締結され、クリミア戦争終了 [Bouyerdene 2008,326]。 9月30日、サヌースイー、教団の本部をジャグブープのオアシスに移す [Vikor 1995,180]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1857年	アブドゥルカーディル、イブン・アラビー著作、『マッカ啓示』初出版に出資 [Bouyerdene 2008,326]。 アブドゥルカーディル、エルサレム、ベツレヘムに巡礼 [Bouyerdene 2008,326]。	5月、カピール地方で女性のマラブー、ララ・ファトマ・ヌスーメル抵抗運動 [Mahsas 2006,138]。7月11日に降伏。翌日、運動に従っていた部族たちも降伏 [Julien 1979, 395]。	ナポレオン3世、ランドン將軍にカピール制圧を許可 [Julien 1979, 394]。 バイルートにシリア科学アカデミー設立、アラブ文芸復興運動が進展 [大塚ほか 2002,1095]。
1858年	アブドゥルカーディル、ユースフ・マグリビーの要請により、ダマスカスのイスラーム教育機関、ダール・ル・ハディース・アシュラフイーヤを再建、彼はそこでハディースの講義を行う [Weismann 2006,203] アブドゥルカーディル著書、『フランス人への手紙』、ギュスターブ・デュガによるフランス語訳でパリで出版 [Bouyerdene 2008,326]。		
1859年			エジプトでスエズ運河工事着工 [大塚ほか 2002,1095]。 サヌースイー教団のムスタガネム支部設立 [Vikor 1995,184]。 8月25日、ダゲスタンで抵抗運動を指導していたイマーム・シャールミル、ロシア軍に降伏 [Bouyerdene 2008,326]。 9月2日、サヌースイー、ジャグブーブで没 [Vikor 1995, 180]。
1860年	7月9-14日、アブドゥルカーディル、ダマスカスで12000名のキリスト教徒をムスリム暴徒から保護 [Bouyerdene 2008,327]。	9月17日、ナポレオン3世、アルジェリアを訪問 [Bouyerdene 2008,327]。	8月7日、フランス、アブドゥルカーディルのキリスト教徒救済の功績に対するレジオン・ドヌール勲章授与の政令公布 [Bouyerdene 2008,327]。
1861年	アブドゥルカーディルの兄でカーディリー教団の後継者、ムハンマド・サイード亡くなる [Weismann 2006,200]。	ムハンマド・イブン・アブドゥッラー、フランスの捕虜となりベルピニャンに送られた [Vikor 1995,213]。	アブデェルアズィズ、オスマン帝国スルターン即位 [Weismann 2006,12]。
1862年	アブドゥルカーディル、ハーツジを行う。エジプト、マッカでは特賓として迎えられ、シャーズイリー教団マダニー派、シャイフ・ムハンマド・ファースイーのもとで修行。タリーカの階梯を通過し、ヒラー山の目的に到達。マディーナの預言者廟に詣で、再びマッカ巡礼を行い、エジプト経由でダマスカスに戻る [Weismann 2006,153: 206]。		
1863年		4月22日、元老院令により、フランスによるアルジェリアの土地の国有を廃し、部族の土地利益・所有権を認める政策が布告された [Abun-Nasr 1987, 264]。	アブドゥルカーディルの通訳を務めたベルマール、『アブドゥルカーディル、その政治・軍事的生涯』をハシェット社から出版 [Bouyerdene 2008,327]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1863年		ナポレオン3世、アルジェリア総督ペリシエに対しての手紙の中で、アルジェリアを植民地としてではなく「アラブ王国」として言及 [Abun-Nasr 1987, 264]。	
1864年	6月5日、アブドゥルカーディル、巡礼から帰還。ジェッダからスエズに下船し運河の工事現場を視察。アレクサンドリアのピラミッド・ロッジでフリーメーソンに入会した [Bouyerdene 2008, 327]。	3月、アウラード・スィーディー・シャイフによるオラン地方での反フランス武装蜂起開始。反乱の指導者スレイマーン・イブン・ハムザは、フランスによって役人に任命されていた。だが、彼の部下が公衆の面前でアラブ局の役人に暴行を振るわれたのを契機に、部族を結集させた [Abun-Nasr 1987, 264-5]。 アウラード・スィーディー・シャイフの部隊、フランス軍をジャバル・アムールで敗北させた。ナポレオン3世によるアルジェリア政策は抵抗分子を制御し、フランスによるアルジェリア支配をムスリムに承諾させるよう変化した [Abun-Nasr 1987, 265]。	
1865年	7月5日、アブドゥルカーディル、コンスタンティノープルのオスマン帝国スルターンを訪問した [Bouyerdene 2008, 327]。 7月、アブドゥルカーディル、パリでスエズ運河に関する公式会議に出席。ナポレオン3世からレジオン・ドヌール勲章を授与され、厩舎、ルーブル美術館、ソルボンヌ大学などを訪問 [Bouyerdene 2008, 194]。 8月初旬、アブドゥルカーディル、イギリスを4日間訪問。ウェストミンスター寺院、国会議事堂、大英博物館を見学 [Bouyerdene 2008, 194]。	5月3日-6月7日、ナポレオン3世、アルジェリアを訪問。入植者に対し、彼らの抱える問題を理解し、功績をたたえると述べた [Abun-Nasr 1987, 265]。 7月14日、アルジェリアのユダヤ人とムスリムにフランス国籍(臣民)を与える法律が制定される。だが、1870年までに194人のムスリム、398人のユダヤ人しかフランス国籍を取得しなかった [Abun-Nasr 1987, 265]。	オスマン朝でナムク・ケマルら若手官僚が秘密結社を結成。立憲君主制樹立を目指す改革運動を開始(新オスマン人) [大塚ほか 2002, 1096]。
1867年	アブドゥルカーディル、ナポレオン3世の公式招待によりパリ訪問。万国博覧会を見学。最後のパリ訪問となった [Bouyerdene 2008, 328]。		
1868年	マッカにおけるアブドゥルカーディルの修行の師、ファースィー、ダマスカスのアブドゥルカーディルを訪問 [Weismann 2006, 198]。		
1869年	11月16日、アブドゥルカーディル、スエズ運河の開通式に参加した。聖地巡礼の許可をロシア皇帝からとりつけたイマーム・シャミルと対面した [Bouyerdene 2008, 328]。	2月1日、アウラード・スィーディー・シャイフ、ウンム・ドゥブダブでの戦い [Mahsas 2006, 138]。	
1870年	アブドゥルカーディル、タンターウィーとムハンマド・タイイブをコンヤに派遣し、写本と出版された版を対照させた [Weismann 2006, 206]	ムハンマド・イブン・アブドゥッラー、アルジェリアに逃亡。ジャグブーブで没したといわれる [Vikor 1995, 213]。	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1870年		9月、アルジェリア、植民者の反帝政運動（アルジェ・コンミュン-71）。普仏戦争敗北への不満爆発。翌年4月に鎮圧[宮治 1978,64]。	9月2日、ナポレオン3世、セダンで降伏、9月4日、フランス、第三共和制宣言 [Bouyerdene 2008,328]。
1871年		1月、ベニ・メナセルの抵抗運動開始 [Mahsas 2006,139]。 2月、ムハンマド・アル・カプルーティの抵抗運動開始 [Mahsas 2006,139]。 3月、アルジェリア、民政移管 [アージュロン 2002,62]。 3月15日、カピール地方でムハンマド・ムクラニーによる、フランス軍支配と徴税への抵抗運動 [Mahsas 2006,139]。アブドゥルカーディルの息子ムフィッディーンが反徒の中にいた [Bouyerdene 2008,328]。 3月25日、フランス総督の判断により、ムクラニーの財産が没収された [Mahsas 2006,139]。 4月、ラフマーニー教団のシャイフ・ハッダードと息子アズィズがムクラニーに加勢 [Mahsas 2006,139]。 5月5日、ムクラニー戦死 [Mahsas 2006,139]。 7月、ハッダード、彼の息子アズィズとともにフランス軍に拘束される [Mahsas 2006,139]。 7月、アルジェリア、土地法制定（フランス法による土地取引と地籍調査）	
1873年		7月、シェリフ・ブーシュシャ、南部のフランス駐屯軍に対して複数回攻撃 [Mahsas 2006, 139]。	
1874年		3月、シェリフ・ブーシュシャ、捕虜となる [Mahsas 2006,140]。 8月、アルジェリア、原住民身分法制定。行政官が裁判なしにアルジェリア人を逮捕することを可能とし、アルジェリア人の移動や職業選択を制限するもの。だが、ムスリムとしての身分を認めたことが民族運動との関係で大きな意味をもった [宮治 1978,66]。	
1875年		6月2日、ベンナセル・ベン・ショフラ、チュニスのベイの圧力によってチュニジアを去りベイルートとダマスカスに向う [Mahsas 2006,140]。 6月29日、フランス当局、シェリフ・ブーシュシャの死刑執行 [Mahsas 2006,140]。	エジプト、スエズ運河株式をイギリスに売却 [中岡 1991,68]。 オスマン帝国、国家財政破綻 [中岡 1991,68]。
1876年		4月11日、ビスクラでの抵抗運動 [Mahsas 2006,140]。	エジプト、イギリス・フランスから国家財政管理を受ける [中岡 1991,68]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1876年			12月、大宰相ミドハト・パシヤを中心に起草されたオスマン帝国憲法の公布。ムスリムと非ムスリムを帝国臣民として平等に位置づけ、あらゆる官職を非ムスリムに開放 [中岡 1991,81]。
1877年			4月、バルカンのスラブ系諸民族の蜂起を機に、ロシアがオスマン帝国に宣戦 [大塚ほか 2002,1096]。シリアでは国家が外国に支配される不安から、アフマド・シュルフを中心として独立運動が起こった [Tauber 1991,27-28]。
1878年	シリアの名士による露土戦争の会議の開催、オスマン帝国の敗退が国家の独立を危険にさらす場合に彼をシリアの王とする計画に同意。ただし、王国はオスマン帝国のハリーフ制への精神的傾倒と住民の忠誠の誓いが条件であった。これに対し、オスマン帝国側は独立運動を弾圧しアブドゥルカーディルとシュルフの接触も禁止された [Tauber 1991,28]。 ブー・マアザ、ダマスカスのアブドゥルカーディルを訪問 [Martin 1976,210]。		2月、セルビア人反乱。ロシアとの戦争の危機感が高まる中、ミドハト大宰相罷免。下院解散。無期限憲法停止 (タンズイマート終焉) [中岡 1993,81]。 ムハンマド・ハーニー、アブドゥルカーディルの一番弟子として、イブン・アラビーの著作についての教授を開始 [Weismann 2006,206]。
1879年		6月、オーレス地方での抵抗運動開始 [Mahsas 2006,140]。	
1880年			ソマリアのウラマー、アウエイシ・モハメド・バラウイが東アフリカ沿岸におけるカーディリー教団の普及に着手 [Martin 1976,163]。
1881年		2月16日、シェイフ・アムードの指導により、トゥアレグ族の反乱開始 [Mahsas 2006,140]。 4月、シェイフ・ブー・アママの反乱開始 [Mahsas 2006,140]。 5月19日、アウラード・スィーディー・シャイフの抵抗運動 [Mahsas 2006,140]。 8月14日、フランス軍による、スィーディー・シャイフの墓廟破壊 [Mahsas 2006,140]。 8月、アルジェリアをフランス直轄領とした併合政策 [アージュロン 2008,v]。 原住民身分法、全国に拡大、これによりアルジェリア人の移動や職業選択の制限が行われ、行政官が裁判なしにアルジェリア人を逮捕することが可能になった [宮治 1978,66]。	6月、フランスの初等教育無償化 (フェリー法)。フランスの小学校歴史教科書でとりあげられたアブドゥルカーディルはアルジェリア原住民の帰順、抵抗事実の隠べいの象徴とされた [服部 & 谷川 1993,172]。 5月12日、フランス、バルドー条約によりチュニジアの主権を奪う [宮治 1978,52]。 スーダンでムハンマド・アフマドがマフディーを宣言、マフディー運動の開始 [Martin 1976,117]。 ナームク・パシヤ、ケマル・パシヤを中心とし、タンズイマートにおいて育成された新官僚・知識人を中心とした「新オスマン人運動」。立憲制度の確立、非ムスリムを含むオスマン帝国再建を目指した [中岡 1991,131]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1883年	<p>1月、アブドゥルカーディル、アルジェリア・チュニジア国境の部族、ウラマーと宗教的指導者にフランスの計画に力を貸すように要求 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,593]。</p> <p>5月25日、25日間の闘病生活の後、アブドゥルカーディル死去、ムハンマド・ハーニー、葬儀の祈りを行う。彼の遺体はイブン・アラビーの隣に埋葬された [Weismann 2006,207]。</p>		<p>マルサ協定により、フランス、チュニジアを保護国化 [Clancy-Smith 1997,xxiii]</p>

後世

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1884年		アルジェリア、フランスと関税同盟。醸造用ブドウの対フランス輸出が急増 [宮治 1978,74]。	アフガーニーとアブドゥ、パリで雑誌『固き絆』刊行 [大塚ほか 2002,1096]。
1887年		『マルセル家の子供たち』初版。アルザス・ロレーヌ喪失の代償としてのアルジェリア獲得が語られた [服部 & 谷川 1993,172]。	
1888年		8月、フランス軍、シェイフ・ブーアマーマの反乱に協力した部族を討伐するためにジャバル・アムール山地に侵入 [Mahsas 2006,140]。	
1889年			フランス、インドシナ連邦成立 [服部 & 谷川 1993,170]。
1897年			アフガーニー、イスタンブルで病没 [大塚ほか 2002,1097]。
1898年			ラシード・リダー、カイロで週刊誌『マナール』創刊 (-1935) [大塚ほか 2002,1097]。
1901年		4月26日、シェイフ・ヤクーブ・ハーッジの指導により、アイン・テュルキーとミリアナにおいて抵抗運動開始 [Mahsas 2006,140]。	
1902年		1月、フランスの行政、アイン・テュルキーの反乱に参加した人物の財産を没収 [Mahsas 2006,141]。 2月、モロッコ当局、シェイフ・ブーアマーマをフィギイグから追放 [Mahsas 2006,141]。 5月7日、シャイフ・アムードの指導によるテイトの戦い [Mahsas 2006,141]。	アブドゥルアズィーズ・イブン・サウードがリヤドを征服。ワッハーブ主義の再生 [Weismann 2006,290]。
1903年		1月、シャイフ・ブーアマーマとモロッコ軍との間でウジュダ近くでのサマミーの戦い [Mahsas 2006,141]。 サラフィー主義者の指導的役割を果たしたムハンマド・アブドゥ、アルジェとコンスタンティーンを訪れる [アージュロン 2002,93]。	
1905年		7-8月、シェリフ地方とカピール地方において、フランス軍、部族を罰するため集団責任の原則により森林の焼却 [Mahsas 2006,141]。	
1908年		青年アルジェリア人、「ムスリムの権利擁護委員会」を組織しパリに代表団派遣 [宮治 1978,101-102]。	ダマスカス - マディーナ間にヒジャーズ鉄道開通 [大塚ほか 2002,1097]。 7月、青年トルコ革命 [Weismann 2006,15]。
1911年			9月、イタリアがオスマン帝国に宣戦 (イタリア・トルコ戦争)。アブドゥルカーディルの息子アリーと彼の息子アブドゥルカーディルはリビアに赴き参戦 [Tauber 1991,36]。 リビアで、サヌースィー教団を中心にイタリアに対する抵抗運動 [大塚ほか 2002,1097]。

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1912年		2月3日、アルジェリア人に対する徴兵の政令公布 [Mahsas 2006,141]。 9月19日、徴兵に関する罰則の政令公布 [Mahsas 2006,141]。 9月21日、マスカラのベニ・シュグランの徴兵に対する抵抗運動の開始 [Mahsas 2006,141]。	3月、アラウィー朝モロッコ、フランスの保護国化 [服部 & 谷川 1993,170]。 10月、オスマン帝国、イタリアと和平協定締結。アリー、リビアを去りエンヴェル・パシャの秘密組織に入る [Tauber 1991,36]。
1914年			7月、第一次世界大戦。オスマン朝は同盟国側で参戦、11月スルタン、ジハードを宣言。連合国支配下にあるムスリムの決起呼びかけ [宮治 1978,82]。
1915年			イギリス、マッカのシャリーフでありアミールの、フサイン・イブン・アリーに、アラブ地域の戦後の独立を約束 (フサイン・マクマホン書簡) [大塚ほか 2002,1097]。
1916年		2月、シェイフ・アムード、ジャネットでの戦いにおいてフランス軍に勝利を収める [Mahsas 2006,141]。 9月、オーレス地方で徴兵に対する抵抗運動 [Mahsas 2006,141]。	5月、英・仏・露がサイクス・ピコ協定により、戦後の中東における各国勢力範囲を密約 [大塚ほか 2002,1097]。 6月、マッカのフサイン・イブン・アリー、対オスマン朝反乱を開始 (アラブ反乱)、アラブの王を名乗る [Tauber 1991,36]。
1917年			7月、フサインの息子ファイサルは反乱軍を率いアカバを占領した。アブドゥルカーデイルはファイサルのキャンプに向かうが彼らの関係は良好ではなかった [Tauber 1991,36]。 10月、ファイサルはアブドゥルカーデイルに、イギリス人将校のローレンスとともにオスマン帝国側の補給を断ち切る目的で、タル・シハーブの橋を爆破するように依頼。アブドゥルカーデイルはそれを拒否し、ダマスカスでオスマン帝国にファイサルの策謀を報告した [Tauber 1991,37]。
1918年			9月はじめ、ムハンマド・ジャマル・パシャ、シリアのアルジェリア人を集結させオスマン帝国側のための地方部隊を編成し、アブドゥルカーデイルと彼の兄弟サイドをその長とした。だが、オスマン帝国軍の劣勢は明らかであった [Tauber 1991,38]。 9月30日午前、アブドゥルカーデイルはジャマル・パシャに対して、ダマスカスを引き上げるよう提案し、午後2時にパシャは出発し、2時半にジャザーイリー兄弟は、シリアの独立をフサインの名前で宣言した [Tauber 1991,39]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1918年			10月1日、ダマスカスがオーストリア軍に包囲されたために、サイードは市街を明け渡した。10月2日、アラブ軍が市街の治安を回復する名目でダマスカスに入場し、アラブ軍に従軍していたローレンスは彼らをオスマン帝国側についたとみなした。ジャザーイリー兄弟は彼と対立し捕らえられた [Tauber 1991,40]。 10月3日、ファイサル・イブン・フサイン、ダマスカスに入城しジャザーイリー兄弟に大赦を与えるものの、アブドゥルカーディルと対立し、7日に再び彼らへの逮捕命令を出す。サイードはアル・マザ、ハイファに収監される。アブドゥルカーディルは彼の祖父の墓に詣でた帰りに警察隊に射殺される [Tauber 1991,41]。
1919年		5月、アブドゥルカーディルの孫、アミール・ハーレド、ウィルソン大統領に嘆願書を提出 [Mahsas 2006,141]。	
1920年		7月、ハーレド、代表団を率いてパリに行き「原住民身分」廃止実現のために陳情 [宮治 1978,105]。	3月、ダマスカスでアラブ政府樹立(7月、仏軍の攻撃により崩壊) [大塚ほか 2002,1098]。
1923年		4月、植民者側から政界引退に追い込まれ、ハーレド、カイロに向かう [宮治 1978,106]。	
1924年		9月3日、ハーレド、エリオ大統領に手紙を送る [Mahsas 2006,142]。	
1925年		3月25日、モーリス・ヴィオレット、アルジェリア総督に任命される [Mahsas 2006,142]。	
1926年		3月、北アフリカの星、パリで結成 [アージュロン 2002,113]。	
1927年		ブリュッセル反植民地会議(アルジェリア・チュニジア代表団参加) [アージュロン 2002,113]。 アルジェでアルジェリア人の政治的地位向上を目的としたムスリム議員連盟設立大会 [宮治 1978,117]。	
1930年	5-6月、アルジェリアの文明化におけるフランスの成果をたたえた征服100周年祭、アブドゥルカーディルの複数の自筆文章、所持品が一般公開された [宮治 1978,114] [Aouli, Redjala& Zoummroff 1994,594]。		
1931年	シャイフ・マダニー著、『キターブ・アルジャザイル』表紙に「イスラームはわが宗教、アルジェリアはわが祖国、アラビア語はわが母国語」が記載。アブドゥルカーディルを国家の英雄と位置づけた [Danziger 1977, 216]。	恐慌の深化、農民負債が増大、抵当流れによる土地喪失件数増大、脱農化と土地集中の増大 [宮治 1978,95]。	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1931年		5月5日アルジェリア・ウラマー協会設立 [Mahsas 2006,142]。論調には聖者崇拜批判、スーフィー教団および異端的行為への攻撃が目立った [アージュロン 2002,114]。	9月、イタリアの軍事征服に対する武力抵抗を率いたサヌースイー教団のムフタル処刑 [宮治 1978,108]。
1933年		5月、北アフリカの星、独立を綱領に掲げる [宮治 1978,119]。	
1936年		1月9日、アミール・ハーレド、ダマスカスで死去 [Mahsas 2006,142]。	フランス総選挙でレオン・ブルム人民戦線内閣成立。アルジェリア人の地位向上をもたらす改革が予想された [宮治 1978,122]。
1937年	7月14日、アルジェリア人民党(PPA) 結成宣言において、緑と白のアブドゥルカーディルの旗が公式に掲げられた。アブドゥルカーディルの抗仏運動との象徴的な関係を示すものとして、アルジェリア国民運動は彼の旗をアルジェリア・ムスリムの国旗として採用したのである [Danziger 1977,217]。	ウラマー協会の会員、ムバラク・ミリ『多神教とその表明』を出版。同書は聖者崇拜を多神教におけるもっとも憎むべき形のひとつとして示した [Abun-Nasr 1987,334]。 10月、アルジェリア共産党設立 [Mahsas 2006,142]。	
1940年		4月16日、アルジェリア・ウラマー協会創始者イブン・バーディース死去 [Mahsas 2006,142]。	6月、フランス本国にナチスに加担するヴィシー政府成立 [アージュロン 2002,118]。
1942年		11月、連合国、アルジェリア・モロッコに上陸作戦開始 [宮治 1978,133]。	
1943年		2月12日、アッパースら、アルジェリア人民宣言発表 [Mahsas 2006,143]。	6月、自由フランス政府(ドゴール派)、アルジェに本拠 [宮治 1978,134]。
1944年		3月14日、宣言と自由の友の運動設立 [Mahsas 2006,143]。旧議員連盟・ウラマー協会・メッサリー派の民族主義者によって組織された [宮治 1978,158]。	6月、サンフランシスコ条約。植民地を巡る戦後処理は、民族自決の原則に沿って国際連合を中心として行われることに [宮治 1978,135]
1945年	5月8日、戦勝記念日の祝賀行事に集まった民衆による暴動。軍隊と警察によって虐殺・鎮圧、セティフでは5万人の犠牲者が出た。植民地主義の暴力としてアルジェリア人の記憶に残る事件 [宮治 1978,158]。PPAが運動を主導し、メッサリーの解放、アルジェリア独立を要求し、アブドゥルカーディルの旗がこのとき初めて人々に振られていた [Abun-Nasr 1987,340]。		
1946年		9月25-28日、アッパース「アルジェリア人宣言民主同盟」結成 [Mahsas 2006,143]。フランスとの連合関係をもつ自治共和国成立を公約とした [宮治 1978,158]。 11月10日、メッサリー派、民主的自由の勝利のための運動(MTLD) 結成 [Mahsas 2006,143]。アルジェリア独立運動の召集とフランス軍の撤退の要求 [宮治 1978,159]。	

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1947年		2月15日、MTLD、初めての会議を開催 [Mahmas 2006,143]。 9月20日、アルジェリア組織法制定 [Mahmas 2006,143]。 10月、MTLD選挙で勝利 [Mahmas 2006,143]。	
1948年		メッサリー・ハーッジ、国連に手紙 [Mahmas 2006,143]。	
1949年	3月29日、アブドゥルカーディルにゆかりのある、スィーディー・ムフィッディーン・モスクなどが歴史的建造物に指定された [Dermenghem 1949, 147]。 10月15日、アルジェリア総督ナジュランが、カシユルーでの石碑《アミール・アブドゥルカーディル、フランスの友》除幕 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,594]。	9月16-18日、宣言と自由と友の会、2回目の集会 [Mahmas 2006,143]。	
1950年		フランス警察、軍事行動の必要性を主張した非合法組織、「特別機関」の解体に着手 [Mahmas 2006,143]。 5月、ウラマー協会、政教分離を主張 [Mahmas 2006,143]。	
1951年		5月1日、MTLDの指導のもと、パリで示威行動 [Mahmas 2006, 143]。	
1952年		5月14日、MTLD、シュレフにて示威行動 [Mahmas 2006, 144]。 5月、メッサリー、フランスによって追放 [Mahmas 2006,144]。	
1954年		11月1日、民族解放戦線 (FLN)、全国30箇所で行った統一行動として武装蜂起開始。アルジェリア戦争へと展開 [宮治 1978,160]。	5月、ディエンビエンフーの陥落。フランス国内で反戦運動が高まる [宮治 1978,152]。 6月、マンデスフランス内閣成立。ジュネーヴ国際会議で、フランス軍のインドシナ撤退方針確認 [宮治 1978,152]。
1955年			9月30日、国連総会でアルジェリア問題がはじめて議題となった。問題が国際化したことで独立運動の宣伝となった [アージュロン 2002,132]。
1956年		8月、カビール地方スィンマム川流域で、FLN綱領が定められ、アルジェリア革命全国評議会、調整・執行委員会の設置、軍管区の確定が行われた [宮治 1978,163]。	3月20日、チュニジア独立 [宮治 1978, 153]。
1957年		FLNとフランス極右組織のテロ活動の激化。フランス、インドシナ民族解放勢力に敗れた空挺部隊、外人部隊などをアルジェリアに投入し、ゲリラ組織壊滅作戦開始 [宮治 1978,163]。	

	アブドゥルカーデイル	アルジェリア	その他
1962年		3月18日、エヴィアン協定。フランスによるアルジェリアへの財政援助、フランスとの合同のサハラ地下資源開発が決められ停戦 [アージュロン 2002,148:149]。 7月3日、アルジェリア独立宣言。132年のフランス支配の後、アルジェリアは独立アラブ国家になった [アージュロン 2002,150]。	
1963年		9月8日、アルジェリア民主人民共和国憲法国民投票。ベン・ベラ、大統領として選出 [宮治 1978,168]。	
1965年		6月19日、副首相兼国防相、ブーメディエン、軍事クーデターにより政権掌握、軍隊・官僚機構、社会主義路線政策 [宮治 1978,192]。	
1966年	7月4日、アブドゥルカーデイルの遺体、アルジェリア本国に送還。翌日、エル・アリア墓地での埋葬が行われた [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,594]。		
1983年	5月25日、アブドゥルカーデイルの死後100年、アルジェリアの雑誌『マジジャラ・エッタリフ』、特別号をアラビア語とフランス語で発行 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,594]。		
1990年	5月22-24日、アミール・アブドゥルカーデイルについてのアルジェリアで初のシンポジウムが組織された [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,594]。		
1991年	5月22日、アルジェでアミール・アブドゥルカーデイル財団創設 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,594]。	12月26日、人民議会選挙でイスラーム救済戦線 (FIS) 勝利 [アージュロン 2002,169]。	
1992年	11月24-27日、アミール・アブドゥルカーデイル財団主催でアブドゥルカーデイルについての初の国際シンポジウムをシディ・ベル・アベス大学にて開催 [Aouli, Redjala& Zoummeroff 1994,594]。	3月4日、FIS 解散命令。軍部とイスラーム主義勢力との対立と長期の内乱が始まる [アージュロン 2002,170]。 FIS の軍隊として、イスラーム救済軍 (AIS) が組織される。同時に武装イスラーム集団 (GIA)、小集団の長をアミールとしてテロ活動開始 [アージュロン 2002,170]。	
1994年	10月31日、コンスタンティーヌにアミール・アブドゥルカーデイル大モスクが建設された [資料 1]。		
1995年			夏、パリで GIA、ターギヤ (圧制者) を相手にジハードを行うと宣言し、テロ行為を行った [アージュロン 2002,170]。

	アブドゥルカーディル	アルジェリア	その他
1999年		4月15日、大統領選挙が行われFLNのブーテフリカが選出された [アージュロン 2002, 171]。	
2000年	5月16-18日、アブドゥルカーディル財団、コンスタンティーヌにおいて国際会議“アミール・アブドゥルカーディルとハーッジ・アフマド・ベイとの間のアルジェリア国家”主催 [Fondation Emir Abd el kader 2001,13]。 11月22-23日、アブドゥルカーディル財団、アルジェ国立図書館において、第2回目となる国際会議“アミール・アブドゥルカーディルと人間の尊厳”開催 [Fondation Emir Abd el kader 2001,13]。		
2006年	11月16日、パリ市5区にアブドゥルカーディル広場が建設された [資料2]。		
2008年	10月28-30日、シリアのダマスカス大学に於いて、アブドゥルカーディル国際会議が生誕200年を記念し開催された [資料4]。 11月29-30日、アブドゥルカーディル生誕200年を記念した国際会議がオラン大学で行われた [資料3]。		